

---

# 魔族（妖狐）族に転生しました

レフェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔族（妖狐）族に転生しました

### 【Nコード】

N0239W

### 【作者名】

レフェル

### 【あらすじ】

アンケート手違いで転生することになった姉弟たちの壮大で大変そうな物語です。転生したのは魔族（妖狐）と人のハーフである。女神の加護をもらって頑張っていきたいこうとする姉弟を応援してあげてください。

## プロローグ（前書き）

リニューアル作品です!!

少し改良して頑張っかけていこうと思います

## プロローグ

真っ白な空間にあたし達はいた。

どこまでも真っ白い空間を見ているので夢かと思い、自分の頬を叩く。

うん、痛いので夢じゃなかった。

「姉ちゃん、これって」

どうやら弟も自分の頬で夢かどうか試したのか頬が赤い。

これは間違いなくテンプレ的な展開に間違いないかと。

にしても、どうしたら戻れるのだろうか。

戻れるなら戻りたいだって

「クリアしたいゲームがあつたのにな」

「姉ちゃん、そればっかだね」

ぽつりと呟くと弟は苦笑いを浮かべて言った。

だって、それが趣味だし。

「ま、僕もしたいゲームがあるし。気持ちわかるよ」

「だよね、責任者でてこーい!!」

弟はあたしを見て笑顔で気持ちの賛同をしてくれたのでテンション

があがり、叫ぶことにしてみた。

そしたら、綺麗な女の人 appeared。

ここまで神聖な雰囲気があるとなんかたじたりそうだよね。  
もしかして、この人が責任者なのかな。

「遅くなつてごめんなさいね。」

「あ、いえ。そんな謝らなくても」

本当に申し訳なさそうに謝る女性。

こういった女性になれたらよかったのにな。

ぼんやりしていると弟にわき腹つつかれて正気に戻る。

「あの、あたし達はどうしてここにいますか？」

「それは…… なんとというか手違いが起つてしまったの」

疑問を持ちだして尋ねると女性は困ったように笑つて言う。  
「いったいどんな手違いがあつたのだろうか？」

「それを説明する前に自己紹介でもしましょうか。  
わたしは女神のヴェルダンディーというの」

「え、あの運命の女神の！？」

ヴェルさんはあたし達に自己紹介してくれた、これを聞いた時かなり驚いた。

だって、北欧神話の運命の女神が目の前にいるんだよ！？  
驚かすには無理だよな。

「あ、北欧神話とは別の女神だから」

「そうなんですか」

ヴェルさんはフレンドリーな態度でニコニコと笑ったまま答えた。  
話しやすいかも。

「姉ちゃん、自己紹介は？」

「あ、そうだった！あたしは芝村要しばむらかなめです。」

弟にせかされて慌てて自己紹介をする。

男でも女でも通用する名前だから、お気に入りではあるかな。

「んで、こっちが双子の弟の」

「芝村璃音しばむらりおんです」

そして双子の弟を紹介する。

こっちも男でも女でも通用する名前なのでいい感じだよね。

「要ちゃんに璃音くんね」

「「はい」」

ヴェルさんはにこにここと笑って言う。

綺麗な笑顔だね。こんな人を困らせる人なんているのかな。

「さて、さっそく話すわね。手違いというのはアンケートのカード  
をあなた達に贈ってしまったということよ」

「あのはがきのことですか？」

ヴェルさんがこちらを見て苦笑いを浮かべて言う。  
その言葉にふと思い出して尋ねると頷いてくれた。

「そのはがきは貴女達に贈られることはないはずだったんだけど」

「手違いが起きてこっちに贈られたと」

困ったように笑うヴェルさんを見て言う。後ろをヴェルさんが見た。  
そこには吊るされた謎の男性がいた。  
うわー、ぼろぼろだよ。

「そこで伸びてるのが犯人よ。手違いとはいえ、貴女達もいずれはこの手紙が送られることにはなっていたから  
それが早められたと思ってくれたらいいよ」

「結果は変わらないということですか」

あたしが落ち込みながら言う。ヴェルさんが頭をなでてくれた。  
ふわー、優しいな

「罰はちゃんといたから、君たちには異世界に転生してほしい  
の」

「拒否権は？」

笑顔でヴェルさんが言う。と璃音が聞いた。

「ないわよ。上の神様と話し合いをした結果がこの状態だもの」

「あの、親が心配すると思うし」

苦笑いをしてヴェルさんは言う「あたしは元の世界にいる親のことを思ってた。」

「その点は大丈夫よ。完全な魂を二つにわけておいたからね」

「ということはあたし達の存在はなくなっていないんですね？」

笑顔でヴェルさんは安心させるように言う。

思わずそれを聞いて尋ねると、頷いてくれた。

それなら安心だ。親を悲しませるのは嫌だからね

「転生してくれるかしら？」

「「はい」」

小首を傾げてヴェルさんは聞いたので二人で声をそろえて返事をした。

するととても嬉しそうにヴェルさんが笑ってくれた。

「ありがとうね、後でお礼のプレゼントを贈るから」

そう言う「あたし達の目の前にカードが現れた。」

合計で7つだ。もちろん、璃音の方にはダーツが出てきた。

「これを選べばいいんですか？」

「ええ、ちゃんとよいものが当たるといいんだけど」



あたしが聞くとヴェルさんは悩んだように言う。  
どういうことが聞くとこのカードは邪神のロキが作ったらしい。  
だから、良いものが当たるといいのだと言ったのか。

「最初はあたしが行くわ！」

まず、一枚目

魔力… S

次に二枚目

刺し穿つ死棘の槍 ゲイ・ボルグ

三枚目

対魔力… B

四枚目

約束された勝利の剣 エクスカリバー

五枚目

全て遠き理想郷 アヴァロン

六枚目

魔眼… A +

ラスト

知識：B

となった。

\*\*\*\*\*

「次は僕だね」

そう璃音は言つとダーツをなげる。

一投目

転輪する勝利の剣  
エクスカリバー・ガラティーン

二投目

対魔力：B

三投目

魔力：S

四投目

織天覆う七つの円環  
ロー・アイアス

五投目

破戒すべき全ての符ルール・プレイヤー

六枚目

花散る天幕ロサ・イクトウス

ラスト

知識：B

「これで終わりね。」

ヴェルさんはあたし達に近寄って言うので頷くと

「それじゃ、良い魔生をおくってね？」

「「え？」」

ニツコリと笑ってヴェルさんが言った後、あたし達に意識は途絶えた。

\*\*\*\*\*

「ふう……これでいいの？」

「ああ、こうでもしないと転生しないだろうしね」

姉弟が消えた後にヴェルだ言うとな人の男性が現れて言った。  
どこか姉弟と似ているような雰囲気をもった感じがする。  
服装はスーツとマントをはおった感じた、

「神聖もいれたのか」

「いまどきあんな子はいないからちよつとしたサービスよ」

ステータスを見た男性が言うつとヴェルは笑顔で言う。

ある程度いじられた状態で誕生する姉弟を哀れに思う男性だった。

「さて、他の人を見に行かないとね」

そう言うつとヴェルは去り、男性は水晶に触れてから白い空間から去る。

## ブローグ（後書き）

ダーツとカードをしようしました!!

## 第1話 姉弟誕生（前書き）

転生といったら赤ん坊からのスタートかなと思って書きました

## 第1話 姉弟誕生

ここは、それぞれの魔族と人が住む隠れ里。

名はサイラスという地名にあるファンダリアという地域だ。

子供は主に魔族と人のハーフとなっている、そんな里にある大きな屋敷でのことでした。

屋敷の中ではメイドや執事が忙しそうに行き来している。

そんな中を少年と少女が慌ただしく両親の居る部屋を目指していた。少年と少女は濃い金色の髪に碧眼で揃って端正な顔立ちをしているのがわかった。

少年は十歳前後で少女は九歳前後だろう。

「お父様、お母様！生まれたって本当ですか！？」「

バンツ！

という音とともに二人が扉を開けて入ると

「シスカ、アクア。そんなに慌てなくても逃げたりはしないよ」

少年が成長した姿のような男性が苦笑いしながら言う。

「そうよ、可愛い子が生まれたんだから落ち着かないとね」

「……はい」

少年と少女の母親は笑顔で窘めて言った。

それに少し落ち込みながら返事をする二人。

母親の髪は金色の髪で青色の眼をしており、とても綺麗だ。

「クスッ……おいで？」

その母親の声を聞いて二人はベビーベッドを覗き込む。

そこにはすやすやと眠る双子の赤ん坊の姿。

生まれたばかりだというのに肌はうっすらとピンク色があった白磁で、ふわふわとした髪はこの世界でも珍しい銀色だった。

頭の上には三角の狐の耳があり、尻には小さいくて短い狐の尻尾があった。

毛並みもよくて耳と尻尾の色は銀色らしかった。

「お父様、この子達はお父様似なのですね」

「そうだね、この耳と尻尾が証拠だろう」

兄、シスカールは赤ん坊を見て父親のディンに言っているとディンは目を細めて答えた。

そう、父親は魔族で極めて少ない妖狐族の者なのだ。

「でも、ちょうどよかったわ。あなたはシスカとアクアがわたし似で、すこしいじけてましたし」

「シェリル、それは言わない約束だろう？」

シスカとアクアの母親のシェリルはクスクスと笑って言うとディンは慌てながら近寄って言った。

それに呆れもするけどほほえましく思うシスカとアクアは見ていた。

「あれ、でも…この魔力」



「この子達には困難なことが待ち受けてるかもしれないけど、守っていきましょうね？」

シスカの妹のアクアは赤ん坊を見て気付くと母親のシェリルが困ったように笑って言った。

「もちろん！」

「わたし達の大切な妹と弟ですもの！」

シスカとアクアはシェリルにはつきりと告げる。  
生まれる前からずっとそう考えていたからそう言えたのかもしれない。

その様子を見ていた父親のディンは赤ん坊を優しくなでてから安堵したように微笑んだ。

\*\*\*\*\*

「「おぎゃあおぎゃあー!!」」

産声をあげてあたし達は意識が覚醒した。

どうやら無事に転生したようだ。と感慨深く思っていると突然扉が開いて

「「お父様、お母様！生まれたって本当ですか!？」」

少年と少女が息をきらして入ってきたのだ。  
これには驚いたよ。

んで、話を聞くとどうやら魔族の妖狐族という種と人間のハーフらしい。

それも双子で生まれたということは極めてまれで珍しいということだ。

魔力も豊富にあるようで将来を心配されるようなことがあるみたいだ。

でも、家族みんなで守ると宣言してくれた。

それが凄くうれしかった。

ヴェルさんに入して転生させてはくれなかったけど、こんな素敵な家族に生まれて嬉しいので恨まないことにしよう。

そう思いながらあたし達は意識を眠らせる。

## 第1話 姉弟誕生（後書き）

感想と評価を楽しみにしております!!

## 第2話 誕生会！

フィル side

「きょうはさわがしいね」

「ぼくたちのたんじょうびだからじゃない？」

今日はすごく騒がしい。

いったい何があるというのだろうかと思って言うと弟のアレクが狐の尻尾を揺らして言う。

「しょつか！だから、さわがちいんだね」

「しよれしかかんがえられないとおもうんだけど」

尻尾を立ててあたしが言うのアレクは呆れながら言う。

この世界に来てから性格が変わってきたのはなんでだろう。

「フィル様、アレク様、そろそろ行きましょう？」

「「はあい」」

執事のルーレイに連れて行ってもらうと会場は凄い人数になっていた。

ここまで人数が多いとなると料理とか大変だったろうな。

「フィルミシア、アレクトル、誕生日おめでとう」

「フィルちゃん、アレクちゃん、誕生日おめでとう」

「「フィル、アレク、3歳の誕生日おめでとう」」

上からお父様、次にお母様でその次がお兄様とお姉さまが祝ってくれました。

こんなに盛大な誕生日パーティーをひらいてもらえるなんて嬉しいな。

「「ありがとうございます、おとうさま、おかあさま、にいさま、ねえしゃま！」」

あたしとアレクは満面の笑みでお礼を言った。  
礼は大切にしないとダメだからね！

フィルend

\*\*\*

Alex side

どうも、アレクです。

双子の姉のフィルはケーキに夢中のように僕は暇なのです。

ここら辺を探索してもいいかな？

でも、迷子になって両親や兄や姉に心配かけるわけにもいかないし。

どうしたもんかな。

迷惑をかけずに各、迷子にもならないような方法がないもんだろっか。

「アレク、食べないのか？」

考え事していたらシスカ兄が話しかけてきた。  
フィルは食べてるのに僕だけ食べないのが心配なのかな。

「ぼく、いまはいらないから」

「そうか、なら…散歩でも行くか？」

僕は申し訳ない気持ちになりながら言う。シスカ兄が僕の頭を優しくなでてくれながら嬉しい提案をしてくれた。  
なんだか嬉しくて尻尾と耳がぴんっと立った。

「うん、いく！」

「なら、決まりだな。」

僕が笑顔で言う。シスカ兄は僕と手を繋いで歩き出した。  
はぐれないよう気をまわした結果なので僕も離れないように頑張って歩いた。

すると苦笑いしてシスカ兄は歩くスピードを落としてくれた。  
優しい兄様に僕は感謝しながら会場を思う存分に散策した。

その際に竜人族とであったり、魔族の猫族とも出会ったりもした。  
ヴァンパイアにも出会ったて、充実した気分だ！

こういう日もたまにはありかな

## 第2話 誕生会！（後書き）

次回も頑張ります！！

### 第3話 魔族の双子の兄妹と幼馴染になる！

あたし達がちょうど6歳になった頃に幼馴染となる双子の兄妹と出会ったのでした。

同じ年なのどこか親近感がよぎったのはあたし達だけかもしれない。

「フィル、アレク。こっちに来なさい」

「「はあい！」」

あたし達はお母様に呼ばれて近寄ると同じ年くらいの少年と少女が立っていた。

男の子の方は金髪のショ・トカットで、紫色の瞳・服は白い貴族服を動きやすくした様なデザインだ。

女の子の方は、赤毛のポニーテール・瞳は紫色・服は白いマントにインナースーツ姿となっていた。

誰だろうと思っっていると

「こちらの二人はフィル達の幼馴染よ」

そう笑顔で言われたのでまじまじと相手を見つめてしまった。

気分悪くないかなと思っっていると相手も目をまんまるにしてあたし達を見ていた。

注目してるのは狐の耳と尻尾みたいだった。

そんなに見られると恥ずかしいかも。

「お母さん、少し用事があるから席をはずすけど。仲良くするのよ



？」

そう言うとお母さんは笑顔で居間から出て行った。  
後に残ったのはあたし達と双子の兄妹だけ。

「あ、あの…初めまして！あたし、フィルミシアといいます。みんなからはフィルと呼ばれています」

「僕はアストリア。えっと…よろしく、フィル」

緊張しながらあたしが言うのと相手も緊張しながら自己紹介をしてくれた。

うう、相手にも緊張させたらダメじゃんと落ち込んでいるとなんてか相手は微笑んでいた。

なにかおかしいことしたかな？  
気になるけど、今はいいや！相手を愛称で呼んでいいか聞かないとね。

「ねえ、アストリアじゃ長いから、アストって呼んでいい？」

「いいよ。でも、そんなに長いかな」

あたしが尻尾を揺らして聞くと頬笑みながら許可をもらった。

アストは自分の名前が長いとは思ってないみたい。

十分長いと思うけどな。

\*\*\*\*\*

Alex side

フィルが自己紹介してる隣で僕も自己紹介することにした。

やっぱり兄妹だからかよく似てるなーと思いながら相手を見て

「僕はアレクトルというんだ。愛称はアレクだよ。えっと…君は？」

「アタシはサテラよ。よろしくね、アレク」

僕は笑顔で言うとサテラも笑顔で自己紹介してくれた。  
笑顔が可愛いなーと思ったのは内緒。  
じゃないとファイルにからかわれるしね！

「サテラ達の種族ってなに？」

「アタシ達のは魔族だよ」

僕が小首を傾げて尻尾を揺らして聞くと笑顔で返事が来る。  
普通の魔族としての魔力が強いということか。

この世界はグロウシュという光があふれている世界だから、人も魔族も獣人もドラゴンも有翼人や魔獣も魔法が使える。  
中には皆既日食に生まれた人間の魔法の力は強いと言われている。  
妖精の加護にあふれている人間も使えるらしい。

中には妖力を使う魔族もいるとか。

ま、僕らは妖力と魔力の両方を使える存在らしいけどね。

「そっか、仲良くしようね」

「もちろん！」

僕は笑顔で言うとサテラは笑顔で頷いてくれた。

これからはどんなときにも一緒に遊んでいけたらなと思う。  
嫌悪する奴らがでてきても僕は仲良くしていきたい。

それが僕とフィルの共通の考えだから。

あと、予断だけど。この後一緒に屋敷内を散策したよ。

途中でサテラの両親に出会ってあいさつもした。

驚いたことにサテラ達の両親って成長したサテラ達みたいだったんだよね。

シスカ兄達とも出会ってサテラ達を紹介したら仲良くしてやってくれって逆に頼まれた。

なんか、複雑だよ。

### 第3話 魔族の双子の兄妹と幼馴染になる！（後書き）

感想と評価をお待ちしております！！

#### 第4話 猫娘姉妹登場する！

フィル side

「暇だね」

「何かすることないもんね」

ふもとにある湖で寝転んでいると

「フィルにアレク！みつけた！」

「サテラ、眠ってたかどうかするんだよ」

親友であり幼なじみの魔族の兄妹がこちらに向かって全力疾走してきていた。

どうしたんだろうと思っていると

「この二人、知り合い？」

「魔族の中でも貴重な猫又族みたいなんだけど」

サテラは小首をかしげて背負ってきた二人の少女を下ろすと聞いてきた。

うん、どこにそんな力があつたのかツツコミたいけど、ここはスルーしよう。

「どれどれ？」

「あ、レナスとレイナスじゃないか」

サテラが下したのでその少女に近寄ると見覚えのある容姿が見えた。  
アレクが驚きながら呟いた。

そう彼女達は突如ここから引越してしまった子達なのだ。

よく見るとところどころ怪我をしているように見えた。

治療の魔法を使い二人の傷を癒すと

「うつ…ここは」

「目が覚めた？レナスちゃん」

ゆつくりと目を開けて言うレナスちゃんに笑顔で聞くと

「フィル！？じゃあ、ここは隠れ里なの？」

「そんなに驚くことないような気がするけど。ここは隠れ里だよ」

レナスが起き上がって言うので苦笑いしてから答えてあげた。

「そっか、戻ってこれたんだ」

「？よくわからないけど、おじさんとおばさんはどうしたの？」

どこか安心したように言うので小首を傾げて聞くと

「えっと…」

「言えないのなら別にいいけどね」

困った表情をしたので笑顔で言い、これ以上の詮索はしないようにした。

「フィル、この二人は」

「あ、紹介を忘れてたね。幼いころに出会ったんだけど、突然引越しちゃった姉妹で。名前は」

アストリアが不思議そうにして近寄って聞くので紹介しようとする

「わたしはレナスでこっちは妹のレイナス。貴方は？」

「僕はアストリアと言うんだ。こっちは妹のサテラ」

レナスが立ちあがって自己紹介するとアストリアに尋ねる。  
アストリアは笑顔で言い、妹のサテラちゃんを紹介する。

「自己紹介もすんだことだし。湖で遊ばない？」

「それいいね！」

わたしが言うのとレナスが満面の笑顔で言った。

ずこつとアレクがこけたのは気のせいということにしておこう

「まずは疲れている二人を休ませることが先決だろ！！？」

「えー！つまんないよ」

アレクがわたしに言うのでむくねながらわたしは言った。  
レナスは苦笑いしながらレイナスを背負う。

「遊ぶのはいつでもできるよ。だから、屋敷に戻ろう?」

「アストが言うなら仕方ないかな」

アストリアが言うので仕方なくわたしは頷いて空間移動の魔法を使  
って屋敷に戻る。

内緒で出てきたから兄さまと姉さまに怒られたけどね。

あ、レナスはお父様とお話があるから書斎に向かったけどね。

\*\*\*\*\*

レナス side

「そうか。ここまでくれば安全だ、ゆっくりと休むといい」

「ありがとうございます」

フィル達のおじさまはとっても優しいからわたし達姉妹の事情もい  
ち早く理解してくれる。

「それから、部屋は客間を使うといい」

「いいんですか?」

おじさまは笑顔で言うので驚きながら申し訳なさそうに聞くと

「いいんだよ。フィル達も嬉しいだろうしね」



「ありがとうございます！！このご恩一生忘れません」

笑顔で言うのでお辞儀をして感謝する。  
この恩は絶対返そうと思う。

だって、フィル達の大切な両親だから。

「では、失礼します」

お辞儀して出て行くとフィルとサテラちゃんが待ちかまえていた。  
どうかしたのかな？

「一緒のお部屋で寝よう？」

「パジャマパーティを開催だよ！！」

とフィルが笑顔で言うのでサテラはににこと笑って言った。  
この二人はある意味似てるのかもしれないな。

そんなことを思いながらわたしは二人と一緒に歩き出した。  
平和な日常をもっと満喫する為に。  
それからもっと強くなる為に。

## 第5話 街、襲撃

フィル side

目が覚めたら、街が燃えていた。  
どうしてこうなったかはわからない。  
呆然としていると扉が開かれた。

「フィルミシア、逃げるぞ」

「良かった。無事で」

お父様とお母様がアタシを見て安堵したように笑ってからまっすぐ  
見つめて言った。

「お父様、お母様。どうして」

「理由はここから逃げてからだ」

アタシが困惑したままで言うとは無をいわずにアタシを抱き上げ  
て部屋から出る。

お母様がアタシの部屋からリュックを取り出して部屋の物をいれる  
と背負って後を追ってくる。

「アレク！」

「お父様、お母様」

次の部屋に入るとアレクも呆然としたようにお父様を見た。部屋にはシス姉達が居てアレクの持ち物をリュックにつめこんでいた。

どうしてここまでするのかわからないけど。  
今の状況から分かることは

この街が襲撃されたということだけだ。  
どうして、こんなことをするんだらう。悲しくて悔しくて涙が止まらない。

「…フィル」

辛そうに兄様が近寄ってきてアタシの頭を撫でてくれた。  
兄様も辛いはずなのに。

途中でレナス達と合流して家の外に出ると、街がメラメラと燃えていた。

恐ろしくてお父様の服を握っていると

「フィルちゃん、アレク！」

「アストにサテラちゃん」

急いで来てくれたのか少し服がボロボロだった。  
傍にご両親が居て、今の事態を知って子供達と逃げてきたのだらう。  
荷物を持っている時点でそう思わないといけない。

「ここは危険だ、早く避難しよう」

「ああ、とりあえず…一番近い街に向かうでしょう」

そうアストリアのおじさんが言うのでお父様も頷いて走り出した。  
この街にいた人々は無事だろうか？

ちゃんと逃げてくれただろうか。そればかりを考えていた。

「おっと、そう簡単には逃がさないぜ？」

「くっ…」

街はずれに向かおうとしてると人影が出てきて行く道を塞いだ。

「先に行け」

「お父様！」

そう言うとお父様がアタシを下ろした。

暖かくて優しいぬくもりが離れていく…嫌だ。

離れたくない

「嫌っ！お父様の一緒じゃないと！」

「フィル…それでも…ここでは誰かが残らないとダメなんだよ？」

アタシがお父様の服を握って言うとお父様はしゃがんで視線を合わ

せて言つと頭を優しく撫でてくれた。

「行くぞ」

「待つて！お兄様！まだ、お父様がっ！」

お兄様にお父様が目で合図するとアタシを抱き上げて走り出した。  
お父様の傍にはアストリアのおじさんも一緒にいた。

「ちっ、逃がすかよっ」

「おっと、お前の相手は我々だ」

人影が動こうとするとお父様が行く手をさえぎって言った声が聞こえた。

しばらくして燃え盛る街を抜けると、ここからでも燃えている街が見えた。

途中で追手も来たのでお兄様とお姉さまが残って追手を引き留めてくれた。

安全な場所に来るとお母様とアストリアのおばさまがいなかった。  
途中ではぐれてしまったのだろうか。

フィル side end

## 第5話 街、襲撃（後書き）

街が何者かによって襲撃。

いったい誰なんでしょうね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0239w/>

---

魔族（妖狐）族に転生しました

2011年10月6日20時39分発行